

The efficacy of medium-to long-term anti-TNF- α antibody-based maintenance therapy in Behçet's disease patients with intestinal lesions

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-06-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神林, 玄隆 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.20780/00032795

主論文の要約

The efficacy of medium- to long-term anti-TNF- α antibody-based maintenance therapy in Behçet's disease patients with intestinal lesions

ベーチェット病の腸管病変に対する抗 TNF- α 抗体製剤の中長期的維持効果の検討

東京女子医科大学 消化器内科学教室
(指導：徳重克年教授)
神林 玄隆

Internal Medicine 2020;59(19):2343-2351. に掲載
DOI: 10.2169/internalmedicine.5000-20

【目的】

本研究はベーチェット病 (BD) の腸管病変に対する抗 Tumor Necrosis Factor- α (TNF- α) 抗体製剤の維持治療継続率と、維持治療症例における製剤開始前後の PSL の使用量の推移、腸管以外の BD 症状の有無を評価した。

【対象および方法】

2003 年 1 月から 2018 年 6 月までに当院で腸管病変に対して抗 TNF- α 抗体製剤を導入した 20 例中、寛解導入が出来た 17 例を維持治療に移行し、グローバル GI スコア (G-GIS) を用いた臨床症状と内視鏡所見の組み合わせで寛解維持治療効果を評価した。G-GIS が 3 または 4 かつ内視鏡で病変を認めるもの、または内視鏡所見が当初の 1/2 以上であるものを二次無効と定義し、維持治療中に投与を中止または変更をしたものを中止症例とした。二次無効または中止症例を脱落群、それ以外は寛解維持治療継続群とし、累積維持率を評価した。寛解維持治療継続群は導入時と最終評価時のプレドニゾロン (PSL) の使用量および、腸管以外の BD 症状の有無を評価した。

【結果】

寛解維持治療群 17 例 (男性 12 例、女性 5 例) の背景は、完全型 5 例、不全型

10例、疑い2例であった。抗TNF- α 抗体製剤はインフリキシマブが7例、アダリムマブが10例で、観察期間における各製剤の治療継続期間は平均257.2 \pm 132.1週、全例で製剤導入時にPSLを併用しており、平均使用量は17.9 \pm 15.1mg/日であった。

17例中、寛解導入後に3例が中止、1例が二次無効と判断され、 Kaplan-Meier法にて評価した累積継続率は2年で94%、4年で87%、6年で72%であった。寛解維持療法群13例のうち9例(69%)がPSLを離脱し、4例(31%)が減量した。抗TNF- α 抗体製剤開始前後の平均PSL使用量は、導入前の13.42 \pm 2.16mg/日から観察終了時の0.92 \pm 2.47mg/日と有意な減少を認めた [p<0.0001]。同13例において抗TNF- α 抗体製剤開始前に腸管以外の症状を有したのは6例で、寛解維持療法中に腸管以外の症状を有したのは5例であった。

【考 察】

本検討は観察期間が平均257.2 \pm 132.1週と長い事の特徴とする。また、既報よりやや高い寛解導入率と寛解維持率を示す結果となった。既報と比較し、導入事の評価方法が異なる事や、やや軽症例が多かった事、PSLの併用量や併用率が異なる事が影響した可能性が考えられた。また、製剤導入後も腸管以外の病変を有した割合が多かったのは、症状の有無のみで、程度の評価では無かったことや観察期間が長い事が影響した可能性が考えられた。

【結 論】

BDの腸管病変に対する抗TNF- α 抗体製剤の維持治療は中長期的にも有効であると考えられた。一方で、腸管病変が寛解維持している症例でも腸管以外の症状を有する症例があり、BD治療の難しさが示唆された。